Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | Self-Reported Eczema in Relation with Mortality from Cardiovascular Disease in Japanese: the Japan Collaborative Cohort Study |
| Author(s) | 西田, 陽子 |
| Citation | 大阪大学, 2019, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/73484 |
| rights | |
| Note | やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

# 論文審査の結果の要旨及び担当者

（申請者氏名）　西田　陽子

| 論文審査担当者 | | （職） | 氏　名 |
|---|---|---|---|
| | 主　査 | 大阪大学教授 | 磯　博康 |
| | 副　査 | 大阪大学教授 | 祖父江友孝 |
| | 副　査 | 大阪大学教授 | 坂田泰史 |

## 論文審査の結果の要旨

【背景】湿疹は全身の炎症を伴うことから循環器疾患との関連が示唆されてきたが、議論は定まっていない。
【目的】日本全国45地域の住民の前向きコホート研究（JACC Study）において、湿疹の頻度を含む自己記入質問紙に回答のあった40歳～79歳の85.099人を対象に湿疹の頻度とその後の循環器死亡との関連を分析した。
【方法・結果】追跡年数は計6,389,818人年、循環器死亡の内訳は冠動脈疾患1,174人、心不全979人、不整脈366人、全脳卒中2,454人（うち脳梗塞1,357人、脳出血1,013人）、大動脈瘤・解離201人であった。Coxの比例ハザードモデルによる多変量解析の結果、冠動脈疾患死亡のハザード比(95%信頼区間)は、湿疹が“あまり出ない”群に対して、“時々出る”群は0.82(0.69-0.97)、“よく出る”群は1.26(1.01-1.56)であった。他の死因ではリスクの上昇はみられなかった。
【総括】湿疹の頻度が高い群で、冠動脈疾患死亡のリスクが上昇する可能性が示された。
一般住民集団を対象として湿疹の循環器疾患リスクへの影響を示したコホート研究はわが国で初めての研究であり、博士（医学）の学位授与に値すると考える。

# 論　文　内　容　の　要　旨
# Synopsis of Thesis

| 氏　名<br>Name | 西田　陽子 |
|---|---|
| 論文題名<br>Title | Self-Reported Eczema in Relation with Mortality from Cardiovascular Disease in Japanese: the Japan Collaborative Cohort Study(自記式質問紙による湿疹の頻度と循環器死亡との関連；JACC Study) |

論文内容の要旨

〔目　的(Purpose)〕

従来、湿疹などの皮膚症状は全身の炎症を伴うことから、循環器疾患死亡の関連が示唆されてきたが、関連がないとする報告もあり、議論は定まっていない。日本人一般集団での調査における自記式質問紙をもとに、湿疹の頻度と循環器疾患死亡との関連を検討した。

〔方法ならびに成績(Methods/Results)〕

日本全国45地域に設定された前向きコホート研究（JACC Study）において、湿疹の頻度を含む質問紙に回答のあった40歳から79歳の85.099人を対象に、循環器疾患死亡との関連を検討した。追跡年数は計6,389,818人年、循環器死亡の死因は、それぞれ、冠動脈疾患1,174人、心不全979人、不整脈366人、全脳卒中2,454人、脳梗塞1,357人、脳出血1,013人、大動脈瘤・解離201人であった。皮膚症状の頻度を問う設問に対する3種類の回答“あまり出ない”“時々出る”“よく出る”により対象者を2群もしくは3群に分類した。Cox比例ハザードモデルを用いて、皮膚症状の頻度を暴露因子とし、年齢、性、およびその他の循環器疾患の危険因子を説明変数として、循環器疾患死亡のハザード比を算出し、さらに、性別と年齢についてそれぞれ層別化して、同様の検討を行った。

Coxの比例ハザードモデルを用いた多変量解析の結果、冠動脈疾患死亡のハザード比は、湿疹が“あまり出ない”群に対して、“時々出る”群は0.82倍(95%CI:0.69-0.97)、“よく出る”群は1.26(1.01-1.56)であった。湿疹が“よく出る”群は、“時々でる群とあまり出ない群”に対して、冠動脈疾患死亡のハザード比は、1.30(1.05-1.61)であった。他の死因ではリスクの上昇はみられなかった。性別と年齢を層別化した検討でも同様の傾向がみられた。

湿疹を伴う皮膚疾患は全身の炎症を伴うと指摘され、この炎症の過程で動脈硬化が進行し、冠動脈疾患による死亡リスクが上昇している可能性が考えられた。他の循環器疾患死亡(脳卒中、心不全、不整脈、大動脈瘤・解離)について皮膚症状の頻度との間に有意なリスクの上昇を認めなかった原因として、冠動脈疾患では脳卒中やその他の血管性疾患より炎症の影響の程度が大きいことが考えられた。

〔総　括(Conclusion)〕

日本人一般集団の前向き研究において、湿疹の頻度が高い群で、冠動脈疾患死亡のリスクが上昇する可能性が示唆された。